

## 南の島にワラジムシを求めて7 — 粟国・伊平屋 —

布村 昇

富山市科学文化センター〒939-8084 富山市西中野町1-8-31

### Short collecting trips to the subtropical islands-7

Noboru Nunomura

Toyama Science Museum, Nishinakano-machi 1-8-31, Toyama-shi, Toyama, 939-8084, JAPAN

2005年のゴールデンウイークの中ほどまではずっと勤務だったが、最後に休みがとれた。混雑の時期にかかっているから石垣島や宮古島は無理と判断して、沖縄島付近で行ったことの無い離島に行くことにした。この時期はまだ梅雨の前のはずで、晴れ上がった沖縄を思い描いたが、実際はいつもよ10日早い梅雨入りとのニュースを耳にし、不吉な予感がした。伊丹から那覇に向かい、ここで小さな飛行機に乗り換える。粟国(あぐに)とはどんな島か見てみたかったし、沖縄島付近の離島の中では主島からかなり離れているので、独特的の種類が見られる可能性があると思ったからである。

#### 粟国へ

那覇空港で乗り換えた時、「荷物を持って体重を量ってください」と言われ、きわめて、小さな飛行機だということをはじめて知った。実はもう

少し大きい飛行機だとばかり思っていた。時間が来て、空港内のバスに乗り込む。さぞ満席と思ったが、2人のみであった。

琉球エアコミューターの玩具のようなプロペラ機、BN-2アイランダーで10人乗りのところ、パイロットを入れて3人のみ。パイロットの動きや計器が手に取るように分かる。ウイーンという騒音がひどいが楽しかった。体重バランスの関係で隣席になったもう一人の客とも「初めてですか?」などと話しながら粟国に向かう。

大型飛行機の合間を縫って離陸した。低く飛ぶので船や波の様子が良く見えた。快適なフライトで粟国空港に着く。民宿の車を呼び、宿に着くとすぐに事前に送ってあった荷物をとり、日が暮れるまで近くの粟国港から「運ん崎」へ行く。しかし、ワラジムシはほとんどとれず、仕方がないので、近づきつつあった特別展用に貝殻を拾ったりした。



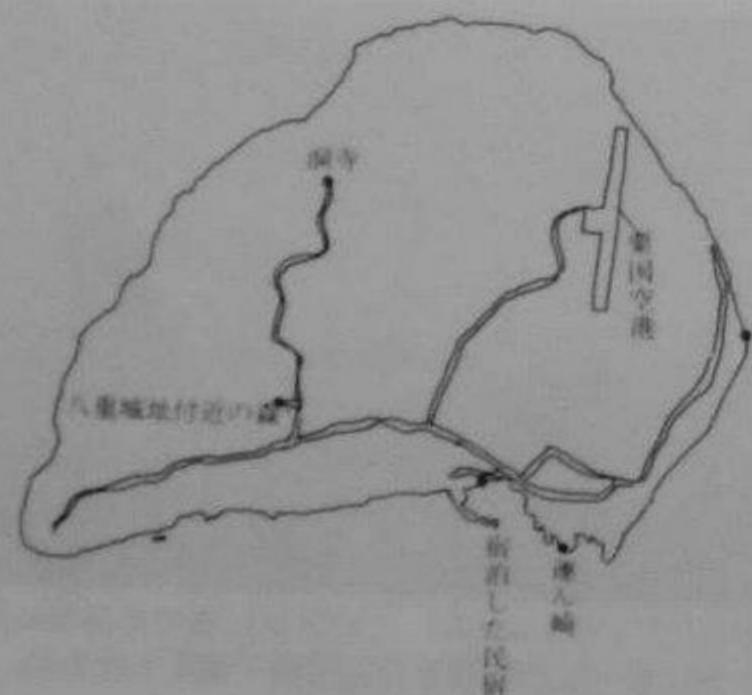
9人乗りのアイランダ-BN、この写真は後で多良間に飛んだときに乗った同型機を石垣空港で撮影したもの。

民宿の夕食時の食堂はまだ、連休中ということで満員であった。一人客どうしは相席になり、私は神戸から来た青年と一緒にあった。いろいろ話が出来るのも楽しい。全体に若者が多く、活気にあふれていた。

食堂のニュース・天気予報をみると、明日は雨が降りそうなので、自転車ではまずいと思い、宿で車を借りることに成功した。これで何とか最低線は確保できた。

翌朝、まずどこへ行くか迷ったが、とりあえず、東の「ウーグ浜」へいくことにした。時々、照葉樹林が点在しているので駐車場はないが、適当な林が見えたので道にとめ、採集を開始した。雨上がりで土が湿っており、ワラジムシ類が予想外に多かった。しかし、かけを降り海岸に出たものの、ここではタマワラジムシとフナムシのみあった。これより先は道路の舗装が無く、それ違いもできないので、中心地へ戻り、西の筆ん崎へ行こうとするが、道に迷って行けなかった。仕方がないので、洞寺（てら）という島の北岸近くの洞窟へ行く。島最大の観光地のようで、時々車が来る。民宿の食堂で相席だった青年も来ていた。

入口の門を過ぎ、雨上がりの門階段を下っていくと雑木林に囲まれたところにある大きな鍾乳洞が目の前に飛び込んできた。大自然が創り出した芸術だと思った。鍾乳洞内は整備され、見学コースに沿って歩道が設けられている。やや怖いくらいの迫力があった。この鍾乳洞は二百年ほど前、那覇の僧侶が問答に負けて流刑にあり、渡島してこの鍾乳洞で読経ざんまいの余生を過ごして亡く



運ん崎。岩礁と砂浜が交代する自然海岸。等脚類の多いことが予想される環境である。

なった後に作られたということある。ここではモリワラジムシとトゲトゲのある小型のダンゴムシがたくさん採れ、期待以上であった。

その後、照葉樹林が発達した八重城址付近の森でも採集をした。かなり、多くのワラジムシが採とれ、満足したので、昼食を取ることにした。しかし、食堂はどこも閉じていて、食堂もやっているという民宿を訪れても断られ、かなりの空腹になつたので仕方なく、よろずやで菓子パンを買い、再び運ん崎海岸へ行って茶とともに食べる。なんと美味だと思ったことか。ここで最後の一あがきをするにした。潮間帯の石を持ち上げてみると、朱色のワラジムシが1頭いた。ヒゲナガワラジムシだが、2頭目がどれだけ探しても見当たらない。帰りの飛行機の時間ぎりぎりまで探したが、ついに見つからずあきらめた。荷物をまとめ、民宿に行き、飛行場へ送ってもらう。天気も晴れてきたし、あとはまたあの小型機か。と思っていたが、なんと、飛行機が飛ばないらしいとのこと、那覇空港が視界不良らしい。



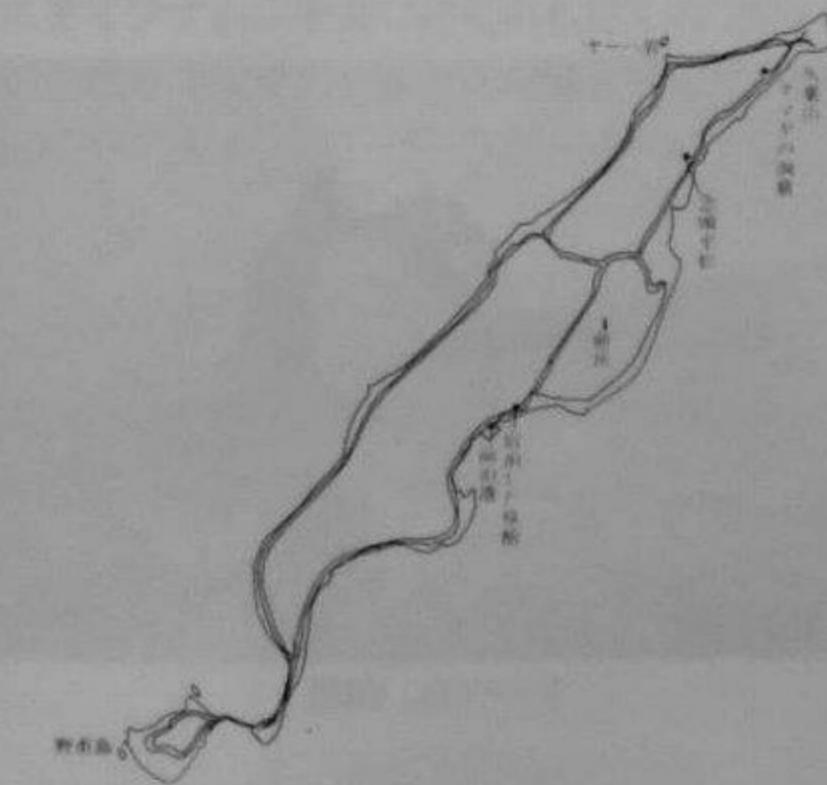
洞寺付近の照葉樹林

少し待ってみたが、結局あきらめ、民宿にお願いし、迎えに来てもらい、港のそばの民宿に引き返した。連休なので、運良く夕方の臨時のフェリーに乗れることになった。民宿で船を待っていると、例の神戸の青年と出会ったので、一緒に港へ行き、あれこれ話しながら2時間半ほどの航海で那覇の泊港に着いた。市の中心部まで、タクシー代を彼とシェアし、バスに乗り換え、名護に向かった。名護までは2時間ほど。ほとんど最終に近いバスであった。

伊平屋へ

翌日、名護のホテルを出て、運天港行きバスの時刻を探しているうちに、バスに乗り遅れてしまった。運天港行きは廃止になったとのことであった。とにかく次のバスまで1時間近くあるので、21世紀の森公園でワラジムシを探したが、散歩している人が多い中でのワラジムシ探しはいかにも異様だった。次のバスでは運転手から運天までのことを聞くと「仲宗根」のバス停であり、タクシーに乗り換えるとのことであった。そのとおり実行したが、タクシー乗り場に行く前に道路の脇にたまたま植物をどけてみると、莫大な数のコシビロダンゴムシが出てきた。適度な湿りなのであろう。

運天港から1時間あまりの船旅で伊平屋に着いた。結構山が多く、奇怪な形の岩もみえる。フェリー待合所で食事をし、レンタカーを借りた。「ハブのいる島によこそ」と書かれていた。この文句は島外の客の心を大いに不安にした。



野重島。砂浜が発達した本脚類の少ない環境である。

とりあえず伊平屋島の南西で橋でつながる野甫島を目指す。途中の海岸は白い砂の海岸が続き、ワラジムシの生息には適していなかった。

砂浜なのであきらめていたが大きなダンボールの下が、ミナミワラジムシなど興味ある種の生息場所になっていた。

島への橋は抜群の美しさであったが、強風がまともに当り、背の高い軽自動車は横風を受け、反対車線まで動いてしまいそうになった。

野甫島の島内は急に道が細くなる。路の脇にも良さそうなリッターはところどころにあるが、シフティングを何度も行ってもまったく取れなかつた。島の出口まで戻りまた例の橋に差し掛かる。ワラジムシがいそうもないで特別展に使う貝がらを拾つてから、野甫島をあとにして再び伊平屋に入る。島の北西側の道路は意外によく整備され、それ違えない場所は無かつた。

「ハブの島」の林の奥深くに入ることは躊躇されたので、確実にハブのいない環境だけを探すこととした。とくに林縁や溝から多くのワラジムシが出てきた。前日に雨が降ったことは非常にプラスであった。いろいろなところに湿気が残り、ワラジムシの生息場所が多くなっていたからである。

今までとは変わった環境には違う種類がいるかもしれないと思って、久葉山にのぼったが、タバの林ではワラジムシがまったく発見されなかつた。天気も悪くなり、夕刻も近づいてきたので、いったん旅館に戻った。いまにも降り出しそうな



-41-

鉛色になった空の下、海岸へ出かけた。波が荒くなり、汀線には近付きにくかったが、大型の貝殻がたくさん打ちあがっていた。大型コウイカであるコブシメの甲などもうちあがっていた。コブシメはまだ肉付で臭い。素手で全て除去して、海水で洗ったが臭いは残った。ビニール袋でくるみ、宿に帰る。夕食が終わって風呂へ行こうと思ったとき、「ドカーン！」という地響きがあり、停電した。近くに雷が落ちたのだ。見渡す限り、集落中、どの家も真っ暗になったが、すぐに電気はついた。

翌日、曇りではあったが、昨日のすごい雨は上がった様子で安心した。朝の散歩に小さな瓶と吸虫管だけを持ち、出かけた。港への街中にはせいぜいホソワラジムシくらいはいるだろうと思ったが、なぜか子供のときから「大きいバケツを持っていくと魚がとれないが、小さいバケツを持っていくと入りきらなくらい採れる」というジンクスを思い出していた。はたして、荒地のような場所からミナミワラジムシ類、タマワラジムシなどが何種も出てきた。思いもかけない収穫であった。

食事を済ませ、島を一周した昨日の経験から「ワラジムシのいそうな場所」を回ろうとした。張り切って出かけたものの、何度も同じところを回る羽目になってしまった。2,3の大変有名な観光地を除き、島には行き先表示など無いのでほとんど勘で走るしかない。

大きな駐車場のある「念頭平松」という名所の駐車場に車を置き、近くに見える照葉樹林とリュ

ウキュウマツの混交林を目指して歩いた。十分ほどしたところの森で、数は少なかったが大型のモリワラジムシがいた。八重山に住んでいるタイプと似ていて期待が持てる。

もうひとつの観光地「クマヤの洞窟」は興味もあったが、通過し、昨日通ったヤーへ岩へ行った。海岸道路沿いに転石らしきものがあったので、海岸独特なものが生息していそうな地形であったので、飛沫帶種を期待したが、フナムシしか採れなかつた。

今度は期待せずに路の内陸側の落ち葉も調べてみる。変わった「ダンゴムシ」が見られた。オカダンゴムシのメスに似た色だが、微妙に形と動きが違う。よく見るとハマダンゴムシだ。普通は海岸の砂の中にいるが、ここでは他の陸産種と同じ土の中にいた。そして、土と同じ色をしていた。タマワラジムシもいたが、砂浜の砂色に対し、土の中のタマワラジムシはもっと濃い体色をしていた。別に白く細いワラジムシが出てきた。このタイプのワラジムシは土壤の落葉落枝層やA<sub>o</sub>層よりもA層以下に多い仲間であるが、1個体しかそれなかった。その属名も解剖しないとわからない。2頭目を捜したが後にも先にもこの1匹だけであった。

時間が迫ってきたので、あと1箇所だけ調査することにし、前岳中腹の照葉樹林を調査した。細い林道に入ると、湿潤で、落葉層が発達し、自然度が高く、多数のワラジムシが生息していそうな照葉樹林があったが、シフィティングをやってみ

るとオカトビムシとヤステばかりであり、意外にワラジムシが少なかった。

とにかくこれで、時間切れだ。荷物をまとめ、郵便局で採集品を送る。土曜で正午で閉まるので、あわてて行くと、ぎりぎり間に合った。そしてレンタカーを返そうとレンタカー屋に行くと。昼食のため鍵がかかっている。携帯電話でやっと電話が通じ、「給油しましたね。鍵をつけて置いといで！」とのことであった。大丈夫なのかと思ったが、他の車も窓ガラスさえ開いていた。なるほどと思った。気持ちもゆったりして、昨日と同じ航路を運天港に引き返した。

#### 沖縄島で

船が運天港に近づき下船の準備をするとタクシーは3台しかいない。下船が最後になってしまったので、タクシーをつかまえられるか不安だったが、皆自分の車か、出迎えの車に消えた。タクシー利用は私一人であった。バス路線が消えるのも仕方がないのかもしれない。観光客にはますます不便になり観光に力を入れるという姿勢と矛盾する。運天から名護までタクシーに乗り、名護から那覇まではバスにした。まだ日は高いので良い場所が有れば途中で降りようとした。良い場所があったが、バスを降りるチャンスを逃し、チャンスを全てつぶして那覇まで来てしまった。

ホテルに荷物を置き、「ダメでもともと」と思い、近くの海辺の若狭海浜公園へ行く。人工海岸の人工公園なので期待はしなかった。私が初めて沖縄にきてフナムシを見つけたのも近くの「波の上宮」付近なので再度フナムシを何頭も採った。その後、散歩やジョギング、ゲートボールなどでぎわう



那覇市。若松公園の溝。多くの種類が群がっていた。

公園内的一角に腰を下ろし、オカダンゴムシくらいはあるかもしないと思い、落ち葉をふるってみると、オカダンゴムシばかりか、クマワラジムシやミナミワラジムシ、森林性のオキナワモリワラジムシまでいる。数センチ角の土に4つの科のワラジムシが確認された。

本州とは違い、各種の分布域が比較的近くにある、島という条件では、この溝のように、カラカラに乾いた広い面積のアスファルトの中であって、「島」のように小さい面積の「適当な湿度の場所」が多くの種を集めているのだと思った。

沖縄島のように大きな島には多様さも粟国や伊平屋のようなより小さい島には無い外来種の多様さがあり、適度な島の大きさが種の多様性に関わっているような気がした。

翌日、首里の県立博物館の展示を見学し、伊丹を経て富山に帰った。夜雨と昼の晴れ間という絶好のワラジムシ調査の天候に恵まれ、島の大きさと生物相の多様さの関連の強さを実感した旅であった。



念頭平松付近の林。意外にワラジムシ類の少ない環境。



ヤーへ岩。環境